



## 宮城全国自治研集会 越前市職レポート 優秀賞に輝く

「LGBT」への取り組み活動に高い評価。越前市公共サービスユニオンは「奨励賞」を受賞

10月14・15日、仙台市で開かれた第36回地方自治研究集会に、自治労福井県本部と県自治研センター

から24名が参加しました。全体の参加者は約2000名でした。

集会は「創ろう、市民自治のゆたかな社会」をメインテーマとして開かれ、前日の前夜祭、全体集会、12の分科会では、東日本大震災から5年という中での復興と防災、いのち、まちづくりなどの視点が強く打ち出されました。

福井県からは、勝山、

坂井、福井、鯖江、越前市などの活動を報告する8本のレポートが提出されました。そのうち、越前市職員組合の緒方祐さんの「LGBT」に関する活動レポートが約250本のレポートの中で最高賞にあたる「優秀賞」を受賞し、越前市公共サービスユニオンの子育て支援センター設立の活動も「奨励賞」を受賞し、5つの受賞の内、2つを福井県関係が受賞するという輝かしい状況で、全国からの注目を集めました。

## 2016福井県地方自治 研究集会in小浜を開催

「地域再発見と賑わいのまちづくり」「文化・観光」を基本テーマに、小浜市の「旭座」で約60名が参加

9月30日から10月1日の二日間、小浜市で「2016福井県地方自治研究集会in小浜」が開かれ、県内自治体の若手職員や市民団体など約60名が参加しました。（主催・



自治労福井県本部 共催・福井県地方自治研究センター）

集会では、「地域再発見と賑わいのまちづくり」「文化・観光」を基本テーマとして、二日目は小浜市商工観光課・課長補佐の「下仲隆浩」氏による「旭座を拠点とした観光まちづくり」の講演を聞き、続いて文化課主事の「西島伸彦」氏による旭座内の案内。その後は小浜街中フィールドワークとして重要伝統建造物が立ち並ぶ街並みを、観光ボランティアガイド「若狭の語り部」さんの案内で巡りました。

このうち、「旭座を中心とした観光まちづくり」では、明治時代に栄えていた芝居小屋「旭座」が時代とともに衰退し、6年前まではポロポロの倉庫として残っていたが、「文化財を守る」という視点のみならず、現代の市民の暮らしに生かせる文化財として活用したい」との発想の下、市民とのワークショップや市民・行政・議会との対話、調整を重ねる中で、2016年4月に市内観光の拠点（まちの駅）として移築復原されるまでの取組みが紹介されました。



プロジェクト」、越前坂井辛み蕎麦  
 であなたの蕎麦で辛み隊初代隊長  
 の後藤寿和氏の「B1グランプリと  
 地域振興」、KISUMO小浜I  
 ターンP Jリーダーの馬場淳子氏の  
 「Iターンプロジェクト」、越前市商  
 業・観光振興課副課長の川邊俊  
 博氏の「ちひろの生まれた家」記  
 念館の4つの活動事例が報告され  
 ました。



の、「地域の人たちや若者、学生た  
 ちとのネットワークは、積極的に自  
 分たちが飛び込んでいけば皆が受  
 け入れてくれる」、「地元住民は自  
 分の地域と暮らしを当たり前の前  
 のように感じているが、都会の人たちか  
 ら見れば魅力に映る」、「表面だけ  
 の観光地ではなく、人々の暮らしが  
 匂う街並みと人情、季節感などを  
 併せ持つ福井は、移住したくなる  
 街」、「まちづくりの活動は多くの  
 人たちに知ってもらうことが大事。  
 新聞、テレビなどのマスコミをより積  
 極的に活用することが大事」などの  
 発言があり、参加者からは地元自  
 治体での活動に多く活かせるとの  
 感想が多数寄せられました。

すべての人がいきいきと  
 健康で暮らせるように、  
 できることから始めよう

〔越前市職員組合自治研推進委員会〕

保健師さんたちが学習会を初開催

わたしたちは平成28年4月に、

保健師13名で自治研推進委員会(保  
 健福祉部会)をつくり、初めて学習  
 会を開催しました。この活動に至っ  
 た理由は、保健師が業務や活動の  
 中で感じている課題や現状を話し  
 合っている中で、①保健師だけの問  
 題ではなく、ほかの越前市職員の方  
 にも現状を知ってもらい、課題を共  
 有していかないといけない。②「保健  
 師」の仕事も理解してもらいたい。  
 ということからでした。

現在、越前市では、16名の保健師  
 が、長寿福祉課、社会福祉課、子ど  
 も福祉課、健康増進課と「こども」  
 から「高齢者」につながる4つの福祉  
 保健介護分野に配置されています。

保健師の業務は、地区分担制に  
 なっており、様々な支援を必要とす  
 る市民の方への「家庭訪問」を主と  
 して、その人に「一番有効な対応は何  
 かを考えながらの活動だけでなく、  
 その取り組みを通して把握した課  
 題に対し、地域や各種団体、産業分  
 野とともに「転ばぬ先の杖」の予防  
 に関する啓発も重要な活動の一つ  
 です。

しかし、看護師の資格を持つ「保

参加者からは、文化財と市民の

暮らしへの視点、市職員として困難  
 な事業に立ち向かう熱意、他事業  
 や地域との連携など、幾つもの示唆  
 と勇気をもたらしたとの感想が多く  
 寄せられました。また、初めて街並  
 みを散策する中で、小浜の魅力に驚  
 かされたという意見もありました。

2日目は、パネルディスカッション

として、県自治研センターの伊藤藤  
 夫氏がコーディネーターとなり、福  
 井市まち未来創造室主事の西澤  
 公太氏の「チームモアイとアゴリズム

この中では、パネラーから、「地域  
 の魅力は、見つけるだけでなく自分  
 たちでつくるもの」、「財源は補助金  
 でなく、自らが活動の中で稼ぐも



たけふ（福祉健康センター4階）で開催し、50名の職員が参加しました。

まず、「パブリックヘルスナーズ（保健師）と越前市民の幸せを考えよう」と題し、越前市の現状報告をしました。

「子ども」の課題に関しては、出生率が毎年減少し続けているが、児童相談件数や母子家庭世帯は増え続けています。その原因として、離婚や未婚の出生も背景にあります。また、幼児健診では、気がかりな子どもが増加傾向

必要な人が増える中で、老々介護や一人暮らし高齢者など支援を要する人が今後増大していくのではないかと課題を提示しました。

同時に、保健師は、「家庭訪問」「健康相談」「健康教育」「関係者・住民との協働」などあらゆる手段を使って住民の方への働きかけをしていること、また事例を通して保健師活動を紹介し、地域には高齢者、大人、子どもすべてに支援しないといけない家庭もあることから、市の内部の連携も必要であることも訴えました。

最後に、支援が必要になる前の「予防活動」が大切ですが、保健師のみでは解決できないことも多いので、市職員の方も関心を持ってもらいたい、そして市民の幸せのため、と

もに頑張っていこうと訴えました。また、私たちの健康づくり活動を体験してもらいたいと「体験コーナー」も実施しました。肌年齢・血管年齢・筋肉量の測定や、「からだにいいスムージー」の試飲や保健師によるハンドマッサージを受けるなど市職員の方に健康づくりの大切さを理解

「高齢者」も増加し、その中で、脳血管疾患や認知症などから介護が必要

していただき、よりフレッシュになつたとのご意見もいただきました。

今回の学習会を通して、各課の保健師が業務の中で抱える課題を話し合い、二つの事業を成し得た良い機会になったと感じています。今後「すべての人がいきいきと健康で暮らせるように、できることから始めよう」という気持ちをもっている部署の仲間たちと一緒に頑張っていきたいと思えます。

（文責）越前市職員組合

自治研推進委員会  
藤下 美樹  
（保健福祉部会）



健師」などの専門職は、役所内の事務的な仕事ではなく「地域」の中で活動ゆえに、市民の方には近いが、役所からは見えにくい活動であることは否めません。

そこで、今、何が地域の「子ども」から「高齢者」に起こっているのか、現状と保健師が活動を通して感じる課題を提示し、より良い「越前市」にするために二石を投じたいと、学習会を開催しました。

学習会は、7月26日にハートフル・

「大人」にあたっては、国民健康保険医療費が53億円にも増加している反面、特定健診の受診率は伸び

悩んでおり、重症化してから医療機関にかかるのではなく、日頃から健康を考える意識をどのように培っていくかが課題です。

「高齢者」も増加し、その中で、脳血管疾患や認知症などから介護が